

H24地域協働研究（地域提案型・後期）

RD-08「釜石におけるスポーツイベントへむけたラグビー民俗誌の作成」

課題提案者：釜石シーウェイブスRFC、研究代表者：盛岡短期大学部 准教授 原英子
研究メンバー：増田久士（釜石シーウェイブスRFC事務局*） *所属は協働研究当時のもの

<要 旨>

2014年7月4日、釜石市は2019年日本でのラグビーワールドカップの開催地へ向け立候補を表明した。日本全体からみた釜石はラグビーの町というイメージが強い。新日鉄釜石のラグビー日本一7連覇（1978-84年）によってつくられたイメージだ。本研究は、第一に被災後の海外からの支援をとおして、釜石がいかに対外的にラグビーイメージをもった町かを明らかにした。第二に7連覇後もラグビーはどのように釜石で継承されてきたのか、主として釜石のラグビースクールに通う子どもと親の目線から明らかにした。これらを通して釜石のラグビーを民俗誌的に——つまり、ラグビーをささえる一般競技者とその家族の目線から——明らかにした。

1 研究の概要（背景・目的等）

2014年7月4日、釜石市は2019年に日本で開催されるラグビーワールドカップの開催地に立候補することを正式に発表した⁽¹⁾。ラグビーワールドカップでの開催地に選ばれるかどうか、立候補地から開催地となるための新たな活動が始まっている。本研究は、立候補の表明がおこなわれる以前の段階でおこなわれたもので、以下のことを明らかにした。

1. 釜石は、鉄とラグビーの町という印象が強い。そうした対外的なイメージがどのようなものかを知るために、釜石のラグビースクールの子どもたちが受けた国内外の支援、特に海外からの支援に着目し、対外的な釜石のイメージを明らかにした。

被災以降、釜石のラグビースクールは、国内外からの招待による試合をおこなってきた。海外では台湾から招待をうけている。台湾は被災地支援が日本全体でアメリカについて多く、当時、多くの日本人を驚かせた。この支援に注目し、アンケートとインタビューによる台湾との交流試合が実現した経緯を明らかにした（写真1）。

これらをとおして、対外的な釜石のイメージのひとつにラグビーが大きくかかわっていることを明らかにした。



【写真1】台湾遠征記念撮影：釜石シーウェイブスジュニアチーム（最前列）と台湾太平國小ラグビーチームと試合関係者（2014年3月22日）

2. 釜石には、2019年のラグビーワールドカップの開催地を目指した動きがあるが、その前に、2016年に「いわて国体」のラグビー会場のひとつとなることと決定している。これらスポーツのビッグイベントへ向けたラグビーの取り組みをあとおしするために、本研究では、釜石でラグビーが盛んだった新日鉄V7時代の釜石から現在まで、ラ

グビーがどのように人々に維持されてきたのか、アンケート調査やインタビュー調査を通して、人々とラグビーのかかわりやラグビーに対する意識を明らかにした。

【注】(1)『岩手日報』WebNews 2014年7月5日「釜石市が立候補正式表明 19年ラグビー W杯」(http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20140705_3)

2 研究の内容（方法・経過等）

1. インタビューと2. アンケートにより、釜石で人々はどのようにラグビーとかがわってきたのかを調査した。

1. インタビュー調査：対象者は以下のとおりである。

- (1)釜石市のラグビーチーム、シーウェイブスのラグビースクール（釜石シーウェイブスRFCジュニア）関係者：子どもとその親、コーチ、スクール支援者など
- (2)釜石シーウェイブスRFCに関心のある人たち：試合を見に来た人たち、盛岡、東京などの応援団
- (3)被災地釜石をラグビーで応援しようとしている海外居住の人たち：具体的には台湾からの支援者
- (4)ラグビーに関心のある人々：岩手県内外でのラグビーの試合関係者と観戦者、岩手県ラグビー協会の関係者
- (5)釜石出身で県外や釜石以外に居住している人

2. アンケート調査：以下の人々に協力してもらった。

- (1)ラグビースクールにかよっている（かよっていた）子どもたちとその親
- (2)ラグビーの試合をおこなった釜石市の中学校の生徒
- (3)台湾で釜石シーウェイブスジュニアとラグビーの試合をおこなった台湾台北市の小学校の児童

3 これまで得られた研究の成果

1. 釜石ラグビースクールの子どもたちへの海外からの支援
東日本大震災後、台湾から日本の被災地へ多くの支援があった。岩手県釜石市への支援のひとつに、台湾のラグビーキッズとの交流試合があった。震災後、運動場に仮設住宅が建ち、子どもたちがスポーツなどで十分な活動ができなくなった時期がある。そうした子どもたちへ、台湾のラグーマンたちが、台湾の子どもたちとの交流試合を

企画し、費用をあつめて2012年3月に日台のラグビーキッズの交流試合が実現した。本年2014年3月にも第2回日台ラグビーキッズの交流試合が実現した（写真2）。

日本や台湾のラグーマンたちが、被災地支援を考えたとき、ラグビーとのつながりから釜石のラグビースクールの子どもたちが支援の対象として選ばれている。かつての新日鉄釜石V7を知っている世代のなかでも、台湾を中心とした日本の海外駐在員たちが中心となって、台湾からの援助を釜石のラグビーキッズにおこなったことは、釜石ラグビーの対外的な位置付けを知るときに重要な事柄としてみることができる。釜石の町のキャッチフレーズにもいわれているように、鉄とラグビーの町としてのイメージは、対外的に強い力をもっていることがうかがわれる。



【写真2】ボールをもった釜石シーウェイブスジュニアの選手。台湾太平国小との試合で（2014年3月22日）

2. 新日鉄釜石V7時代からのラグビーの遺産：

ラグビーは人々にどのように継承されているのか。

(1)対外的なラグビーイメージと違い、今の釜石の子どもたちはほかの地域の子どもたちと同様、多くは野球やサッカーに興味をもっている。そのなかで、ラグビーに関心を寄せる子どもたちは、なぜラグビーを選択したのだろうか。こうした視点からアンケート調査をおこなった。

その結果、ラグビースクールに通う子どもたちの親や親戚、兄弟がラグビーをしている傾向が見られた。なかにはラグビーが3代継承されている家庭もあった。そうした家では、男女にかかわらず子どもはラグビーをする傾向がみられた。またキョウダイがいる場合、キョウダイともにラグビーをする傾向があった。

一方、中学校で他のスポーツをしていてラグビーシーズン期間に、ラグビーを経験した中学生は、ラグビースクールで小学生からラグビーに親しんでいる場合に比べ、家族や親戚でラグビーをしている者がすくなかった。そうした臨時のラグビー部に入った生徒がラグビーをおこなった動機は、友だちがしていたからという回答が最多だった。

幼いころ始めるスポーツには、親や祖父、親戚などの影響が認められるが、中学生くらいになると、友人との関係、スポーツのかっこよさなどのスポーツ自体の魅力も影響を与えることがわかった。

(2)この他、岩手県のラグビーチームの歴史の変遷を明らかにした。その結果、高校ラグビーチームの創部にはピー

クが3回あったことがわかった。この他、特に注目したいのは1970年開催の岩手国体で、各年齢層にラグビーを広めることになった。かつてラグビーをしていた不惑世代のチームの創設、小学生のラグビースクールなどの開設がこの前後におこった。新日鉄釜石の連覇前後の1970年代から80年代にかけては、小学生のラグーキッズが増え、岩手県沿岸部の宮古、釜石、大船渡、久慈にラグビースクールが開設された。

4 今後の具体的な展開

今回の調査研究をとおして、岩手県でラグビーをはじめるときの契機には、幼少では始める場合には、家庭環境や地域における指導者の役割が大きいことが明らかになった。

今後、2016年のいわて国体でのラグビー会場などをとおして、釜石のラグビー意識はどのように変化していくのであろうか。2019年のラグビーワールドカップの立候補地から開催地になれるかどうか、大きな鍵となるであろう。

今後は独立法人日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤(C) 課題番号26350807-0001 研究代表者 原英子 2014年度～2018年度）により文化人類学的視点からラグビーの調査・研究を継続している。

5 その他（参考文献・謝辞等）

<参考文献>

1. 原英子2013「釜石シーウェイブスRFCジュニアの台湾でのラグビー交流と日本郵船一東日本大震災被災地への支援の背景―」（南島史学会編『南島史学』81 52-33、(169) - (187)）
2. 原英子2014a「岩手県のラグビー(1)岩手県のラグビーの歴史的動向」（『岩手県立盛岡短期大学部研究論集』16）31-36
3. 原英子2014b「岩手県のラグビー(2)現在の釜石のラグビー状況―アンケート調査結果より―」（『岩手県立盛岡短期大学部研究論集』16）37-42
4. 原英子2014c「2019年ラグビーワールドカップを釜石で！―ラグビー民俗誌の作成から見えてきた地域のラグビー土壌を考える―」（岩手県立大学地域連携本部『平成25年度岩手県立大学公開講座滝沢キャンパス講座・地区講座報告集いわての今を識る 復興へ歩みつつけるいわて』）63-72

<謝 辞>

本研究は協働研究者の増田久士様、釜石シーウェイブスRFCジュニアのラグビースクールの米澤明校長、事務局の大畑コーチやコーチの皆様、ラグビースクールの子どもたちやご両親、桜庭吉彦様、岩手県ラグビー協会の沢口明平様、釜石シーウェイブスRFC応援団の皆様など大勢の方にお世話になりました。この場をかりてお礼申し上げます。